

アベンダノン編カルティニ書簡編集の考察 ——1911年編と1987年編を比較して——

富永 泰代*

The Epistles of Kartini to Abendanon : Compared *Door Duisternis tot Licht* with *Brieven*

Yasuyo TOMINAGA*

Raden Adjeng Kartini (1879–1904) became famous both in the Netherlands and Dutch East Indies after the posthumous publication of a selection of her letters to 10 persons. This correspondence was exchanged between 1899–1904; the compilation was published by Henri Abendanon under the title *Door Duisternis tot Licht* [*Through Darkness to Light*] in 1911, seven years after Kartini's death. He was the Director of Education, Religion and Industry and a promoter of the Ethical Policy in the Dutch East Indies. In the preface to the collection, H. Abendanon wrote that the publication was aimed at the establishment of Kartini Schools in Java. All of the letters written by Kartini were not printed by H. Abendanon who selected only some of her letters in order to ensure that the compilation was read in both societies. In other words, he aimed to create a readership for *Through Darkness to Light* both in the Netherlands and in Java. The second and third editions were printed in March and November, 1912. The book was a great success. And its Indonesian version titled *Habis Gelap Terbitlah Terang* has been much influenced by Abendanon's compilation.

Door Duisternis tot Licht is regarded as the principal source on Kartini studies. And Kartini is discussed in the context of Indonesian nationalism and the Ethical Policy at the beginning of the twentieth century. Although it is true that Kartini has mainly been considered in relation to the Ethical Policy, she was born and acquired a Dutch education before the policy was implemented. By 1964, she had become one of the *pahlawan nasional* [national heroes]. Today, she is especially acknowledged as a forerunner of the women's emancipation in Indonesia.

In 1987, *Brieven : aan mevrouw R. M. Abendanon-Mandri en haar echtgenoot* [*Letters to Mrs. R. M. Abendanon-Mandri and Her Husband*] (hereafter cited as *Brieven*) was edited in the Netherlands. That book contains the complete correspondence between Kartini and Mr. and Mrs. Abendanon. More than ninety letters written by Kartini to Rosa Abendanon and nine letters to Henri Abendanon are printed in full. On the other hand, in *Through Darkness to Light* less than fifty letters written by Kartini to Mrs. Abendanon and five letters to Mr. Abendanon were published by the latter; moreover, for the most part, only extracts from these letters were included. It is important to compare both the editions. This comparison reveals the reason and the way of Abendanon's compilation. Further, that reveals Kartini's voice vanished in his complication. *Brieven* shows that Kartini could directly approach new European thought of the late nineteenth century and that Kartini's letters are a humanist account of a cultural encounter related to the dignity and worth of a human being.

はじめに：問題の所在

カルティニ Raden Ajeng Kartini, 1879–1904 は、1879 年に中ジャワの貴族の家庭に生まれ、ヨーロッパ人小学校でオランダ語を学んだ。12 歳から数年間、慣習に従って家に籠ったが、オランダ

* 大阪大学非常勤講師

語の書籍で最新の知識を学び、一夫多妻制に異議を唱え新時代の女性の生き方を模索した。そして、女子教育や木彫工芸を通じて地域振興に取り組んだ。が、産後の肥立ちが悪く 25 歳でこの世を去った。1911 年、カルティニがオランダ人の友人に宛てた書簡が *Door Duisternis tot Licht* (『闇を越えて光へ』) と題して出版された。以降、一世紀にわたり *Door Duisternis tot Licht* は、カルティニ研究の主要テキストとして用いられてきた¹⁾。とくに、カルティニの場合は「書き記した言葉だけによって後世に語り伝えられる例は、カルティニをおいてほかにあまりない。」と記されるように [土屋 1991 : 148]、書簡に負うところが絶大である。

その編者はカルティニの文通相手であったオランダ領東インド政庁教育・宗教・産業局 Departement van Onderwijs, Eeredienst en Nijverheid 長官アベンダノン J. H. Abendanon (1856–1925) であった。この本はオランダ社会に広く迎えられた [Geertz 1964 : 23], [Soeroto 1984 (1977) : 425]。そのインドネシア語抄訳版 *Habis Gelap Terbitlah Terang* (『闇を越えて光へ』) は版を重ねている。しかし、出版当初から、アベンダノンの編集はさまざまな憶測や懷疑をまねいた²⁾。カルティニの実態と乖離した想像すなわち「カルティニの虚像」が形成されたともいわれている。したがって、*Door Duisternis tot Licht* やインドネシア語版だけに拠るカルティニ論は、アベンダノンの編集の影響は免れない。

1987 年に *Brieven : aan mevrouw R. M. Abendanon- Mandri en haar echtgenoot* (『アベンダノン夫人とその夫へ宛てた書簡集』) が刊行された (概要は後述、*Brieven* を主要資料とする論文は注 9 参照)。 *Door Duisternis tot Licht* と一線を画す点は、

- ①全文が省略されず掲載されている。
- ②プライベートな手紙に記された、広く流通することを前提としない記録資料である。
- ③カルティニが見た社会矛盾や個人的な経験などの事例が数多く記されている。

しかし、先行研究にはアベンダノンの編集を批判の対象としない共通点があり、*Door Duisternis tot Licht* は編集手法が解明されずに今日まで主要テキストとして引用されている。

本稿では、筆者の博士学位論文の序章「*Brieven* と *Door Duisternis tot Licht*」を基にしてアベンダノンの出版目的と編集の恣意性を論じる。なぜなら、カルティニの原書簡がアベンダノンによってなぜ、どのように編まれ、社会に受け入れられたのか、その出版状況をも含めた検討が、カルティニの実像を探究するためには喫緊の要事の一つであると確信するからである。*Brieven* を基軸として *Door Duisternis tot Licht* を比較、分析を行う際には、前者を 1987 年版、後者を 1911 年版とする。

第一章 アベンダノン編『闇を越えて光へ』の構成

本章では、はじめにアベンダノンの出版の意図とその構成を述べる。アベンダノンは初版の序文に「出版の目的は、書簡の著者が構想したジャワ人首長の女子のための寄宿制・全日制学校設立にあり、出版社から私に支払われた全てはラデン・アジュン・カルティニ学校 Raden Adjeng Kartini-School のために、その財政の礎を築くものである。」と明記している [Kartini 1911 : viii]。第二版の序文 [Kartini 1912 : viii]、第三版の序文にも「ラデン・アジュン・カルティニ学校 (イタリアッ

ク体で表示)のために出版する。」と述べる [ibid: x]。

しかし出版当初から、カルティニを最もよく知る文通相手は次のように批判した。

「カルティニはジャワのプリンセスで、美しい本を書いた方でしょう。」と、言われるが、カルティニは本を一冊も書いていない。素晴らしい書簡をたくさん綴り、それが一冊の本として編まれたのである。(中略) それ故、私はその本を小説 roman のようなものと思った [Ovink 1925: 1]。

確かに、「小説のようなもの」という言葉に、露骨な目的をもったアベンダノンの編集によって、カルティニの「素晴らしい書簡」が実態と乖離した「読み物」に仕上げられたことへの、厳しい怒りを看守できる。当時としては数少ない女性の作家であり、カルティニが全幅の信頼をおき「お母様」と呼んだオーフィンク M. C. E. Ovink- Soer 夫人によって *Door Duisternis tot Licht* の恣意性が指摘された重大発言である。

しかし、彼女が指摘した点にこそ、アベンダノンが出版で成功をおさめた要因がある。オランダ語の出版市場で、初版 1000 部は数ヶ月で完売し、続く第二版 3000 部も 7 ヶ月で完売したため、即第三版 4000 部が刊行された。つまり、その商況は当初から極めて好調な滑り出しをみせ、1 年余で 8000 部に達した³⁾。第二版以降、オランダのみで重版された事実は、オランダ本国の出版市場に絞って購読者を確実に獲得できたことを示す⁴⁾。また、その刊行は時宜を得た企画であった。アベンダノンは倫理政策の施行から 10 年を経た 1911 年に、洋式教育を受けたカルティニがオランダ語で書いた書簡を広く社会へ提示し、人々に政策の成果を実感させた⁵⁾。刊行後はさまざまな言語に翻訳され広く知られた⁶⁾。すなわち、アベンダノンはマーケティングに限れば成功した。

本文には 1899 年 5 月から 1904 年 9 月まで、次に挙げた名宛書簡が収録されている。

1. ローザ・アベンダノン Rosa Abendanon (政庁教育・宗教・産業局長官の妻)
2. ヘンリ・アベンダノン J. H. Abendanon (政庁教育・宗教・産業局長官)
3. E. C アベンダノン (アベンダノン夫妻の子息、通称ディディ、エディ、地質学の専門家)
4. アドリアニ N. Adriani (オランダ聖書協会が派遣したトラジャの言語・文化の専門家)
5. アントン G. K. Anton (ドイツ人、イエナ大学教授、国際法と政治学の専門家)
6. ヒルダ・デ・ボーイ・ボアスぺーン H. G. de Booy- Boissevain (総督付副官の妻)
7. ヘンリ・ファン・コル H. van Kol (SDAP 社会民主党議員)
8. ネリー・ファン・コル Nellie van Kol (ファン・コルの妻、文筆家・女権拡張推進者)
9. シャルロット・オーフィンク・スール M. C. E. Ovink- Soer (副理事官の妻、文筆家)
10. エステラ・ゼーハンデラール E. H. Zeelandelaar (アムステルダムの公務員、社会活動に従事)

上のリストには様々な分野で活躍した著名人が大半を占める [富永 1991: 35]。このような多様性に富む文通相手に宛てた筆致ゆえに、1911 年版は世界各国で読者を得たといえよう。しかし、編集に際し全ての書簡は提供されていない。例えば、E・ゼーハンデラールは 25 通の書簡と数葉の葉書を所有したが、提供した書簡は 15 通にすぎない⁷⁾。原書簡はアベンダノンによる編集の前に、

提供者が選別していたのである。現在、削除された文章が特定できる書簡はアベンダノン夫人宛、アベンダノン氏宛を除いて、ゼーハンデラル宛書簡だけであるが、*Door Duisternis tot Licht* の中でしばしば目にする「ミシン目」が、削除の形跡を今に伝える。

さらに、詳細に分析すると、カルティニの動向を知るための主な拠所となる書簡は、その実、アベンダノン夫人宛書簡とアベンダノン氏宛書簡に集中する。収録された全書簡 105 通のうち両者の書簡が半数を占める。ゼーハンデラル宛書簡は全体の 1 割強にすぎない⁸⁾。他の文通相手 7 名に宛てた書簡は合算しても約 3 割にすぎず、クリスマスなど慶事への返礼を主として 1901 年と 1902 年にかたよる。とくに、カルティニがオランダ留学を断念し、結婚を決意した 1903 年以降では、全書簡数の 3 分の 2 をアベンダノン夫人宛とアベンダノン氏宛の書簡が占め、他にはファン・コル夫人とアドリアニ博士、E. C アベンダノンからそれぞれ 2 通、ゼーハンデラルとアントン博士から 1 通ずつ収録された [永積 1980: 78-79]。つまり、1903 年と 1904 年についてはアベンダノン宛書簡を中心に構成されている。

また、書簡の礼辞と結辞が削除された。一般に、欧文書簡では本文における時候の挨拶が不要な代わり、冒頭における礼辞は欠くことができず、親疎の程度で表現法が異なることから、名宛の人物と差出人との関係を表出する。それは結辞においても同様である。しかし、アベンダノン家に宛てた書簡が他を圧倒することから、親疎の程度を示す意味はないと断じた編者の驕りが窺える。

ここで、1911 年版の比較対象となる 1987 年版の概要を記す⁹⁾。それは、オランダの K. I. T. L. V (Koninklijk Instituut voor Taal-, Land-, en Volkenkunde の略、王立言語・地理・民族学研究所) で編集・出版され、表題 *Brieven: aan mevrouw R. M. Abendanon Mandri en haar echtgenoot* (『書簡集: アベンダノン夫人とその夫宛』) が示すように、アベンダノン家に届いた書簡が 1900 年 8 月 13 日から 1904 年 9 月 7 日まで収録されている。序文で編者ヤケット F. G. P. Jaquet は、

1986 年にハーグ在住のアベンダノンの孫に当たる人物と面会し、カルティニと彼女の身内の書簡および写真、カルティニ基金関係の書類が保管されているのを知った。これらの書簡の出版によって、カルティニと家族の日常や 20 世紀初頭のジャワにおける植民地の状況を容易に捉えることができるであろう [Jaquet 1988: 75]。

とする。さらに、ヤケットが強調する点は、*Door Duisternis tot Licht* は編者のアベンダノンが目的をもって出版したが、*Brieven* の出版には何の意図もないことにある [ibid: 75]。*Brieven* に収録されている書簡の内訳は、次の通りである。

- ・カルティニ (104 通, 内、カルティニと妹の連名の書簡 3 通),
- ・妹ルクミニ (23 通), カルディナ (7 通), カルティナ (2 通), スマトリ (1 通)
- ・父親ソスロニングラット (1 通)
- ・カルティニの夫ジョヨアディニングラット (1 通)
- ・アベンダノン家の訪問カード (カルティニ, ルクミニ, カルディナ, 計 3 通)
- ・カルティニのアベンダノン夫人へ贈呈した創作物語 (1 本) [富永 2011: 7]

カルティニの書簡 (以降「87 年版カルティニ・ドキュメント」と呼ぶ) の内訳は、アベンダノン氏宛書簡 9 通と夫妻宛書簡 4 通を除くと、すべてアベンダノン夫人宛書簡である。冒頭で述べた

1911 年版と一線を画す点に加え、特筆すべきはアベンダノンが 1911 年版に採用しなかった書簡が掲載されていることにある。

まず、「87 年版カルティニ・ドキュメント」を基にして、1911 年版に収録されたアベンダノン宛書簡数（アベンダノン夫人宛書簡 46 通、アベンダノン氏宛書簡 5 通および夫妻宛書簡 1 通）を比較し、アベンダノン夫人宛書簡・アベンダノン氏宛書簡・夫妻宛書簡が 1911 年版の編集で削除された比率を、年毎に次に示す¹⁰⁾。

1900 年分書簡（文通を開始した 8 月から 12 月まで）の削除比率が 6 割

1901 年分書簡の削除比率が 8 割 1902 年分書簡の削除比率が 8 割

1903 年分書簡の削除比率が 8 割 1904 年分書簡（9 月まで）の削除比率が 7 割、

平均すると削除の比率は 7 割強である。複数の段落を削除して書簡の大半をカットする手法によって、原書簡の起承転結は瓦解されカルティニの主張は換骨奪胎された。そして、出版の目的性と合致する部分がクローズアップされた。

第二章 アベンダノンの編集手法：「切り貼り」による「創作」

Door Duisternis tot Licht がオランダで版を重ね、時を移さずして西洋諸語に翻訳・出版された（注 6 参照）。換言すれば、それはアベンダノンが西洋人に受け入れ易い編集に努めた証でもある。どうすれば読まれるかという命題に対し、アベンダノンはどのような「努力」をしたのであろうか。そもそもカルティニの原書簡は、世紀転換期に特定の相手の理解力に適うよう綴られた。しかし、アベンダノンにとって出版は一大事業である。彼は「市場」を意識し、不特定多数の読者に受け入れられる文章にするために、積極的に切り貼りを行った。このため、1911 年の刊行を機に書簡は公開される文章に変化した。カルティニは心に映り行く事柄を記す時には、特定の人物だけに心理を描写した。これはカルティニの書簡すべてに見受けられる特徴である。それは基本的にアベンダノンの削除の対象になったが、必要とあればアベンダノンは「切り貼り」と調整で、「美化」し「昇華」させようとした。アベンダノンの編集に対する恣意性について、スロト S. Soeroto は次のように指摘する。

目的はカルティニ学校を設立する募金にあったから、読者が寄付をする気になるよう、オランダ社会の同情を得ることが必要であった。オランダ人を惹きつける事柄を全面に出し、オランダ人読者が良く受け取らない事は掲載しなかった。公開されなかった事柄には、カルティニの政庁やオランダ人に対する批判が含まれていると推測する [Soeroto 1984 (1979) : 424]。

1987 年版が刊行されていなかった当時であってスロトの意見は推測である。が、アベンダノンがオランダ人購読者を強く意識して編集したという指摘は、当を射ている。

1987 年版に存在しない「1901 年 1 月 21 日付書簡」を例に挙げ、その編集手法を次に示す。なお、次に挙げた引用文のうち両書簡に掲載されている文章は斜体にして表記する。

手順①アベンダノン夫人宛の 1901 年 1 月 31 日付宛書簡「原文書簡」を分割して、新たに

「1901 年 1 月 21 日付アベンダノン夫人宛書簡」（1 月 21 日付創作書簡と略す）を設ける。

②1901 年 5 月 25 日付アベンダノン夫人宛書簡の「結び」—次に挙げる（A）文から斜体簡

所を「1月21日付創作書簡」の冒頭に貼り付ける。

- (A) 今日の午後、我々はホンフレイブ *Gonggrijp* 夫人（オーフィングの後任の副理事官夫人）と浜へ行き海水浴をしました。海は穏やかで澄み渡り、私は岩に腰掛け水中に足を浸し、遥かなる水平線を眺めました。おお！地球は何と美しいのでしょうか！喜びと感謝と平和を心深く感じました。母なる自然は我々を決して放っておきはしないでしょう、もし私が慰めを求めれば！－奥様（筆者註 アベンダノン夫人）とこの海で楽しく過した時を思い出しておりますので、帰宅するや否や文を認めた次第－お耳を傾けてくださるにちがいません [1901年5月25日付アベンダノン夫人宛書簡, Kartini, 1987, 55]。

上述は、アベンダノン夫妻との出会いから10ヶ月近く経ち、「カルティニ姉妹のバタヴィア遊学辞退」を父親がアベンダノン長官に申し出る直前、5月末に書かれた書簡である。それは、結果的に頓挫するアベンダノン長官の「女子校設立計画」に対する支持が、年初に比べて降下を辿った時期であった [富永 2011: 181]。カルティニはアベンダノン夫人と談笑した海で、アベンダノン夫人に思いを馳せ、「母なる自然 *Moeder Natuur*」の「母」にアベンダノン夫人を重ねて書いた。つまり、カルティニはアベンダノン夫人を海として信頼し、アベンダノン夫人がカルティニ姉妹を見捨てないと思える、即ち助けを求めた。

しかし、斜体文だけを読むと自然賛美に終始する。この文章の直後に、「アベンダノンの女子校計画」真最中であった1901年1月31日付書簡から「知育だけでは教育者の使命をはたしている」と、私は思いません人格形成にも配慮すべきです。」という文章が「1月21日付創作書簡」に切り貼りされ、次のようにアベンダノンの編集は続く。

知育にはモラルに関する教育が行われていません。高い知性にも拘らず精神的に洗練されない人は枚挙にいとまがない。大抵はその人自身の誤りではなく、受けた教育が誤っているのです。知育には多くの注意が払われますが、人格形成については一体何がなされたでしょう－全然なされていません！（中略）人は最初に女性から教育を受け－その膝の上で子供は感じ、考え、話すことを学び－初期の躰は一生を通じて非常に重要です。母親に教育がなければ子供を育てることができません [1901年1月31日付アベンダノン夫人宛書簡, Kartini, 1987, 45]。

上述は、この2年後に覚書「ジャワ人に教育を」（1903年）に結実するカルティニの思想の一端である。覚書では人格教育の必要性を性別・人種を越えて説く。が、アベンダノは、カルティニの主張を女子教育に特化させた。この直後に1901年1月31日付書簡の次の文章が「1月21日付創作書簡」に貼り付けられた。

現地人女子教育に関する回状即ち「教化の牽引者としての女性」というご主人様（筆者註アベンダノン長官）の主張に賛同申し上げます。女性は、それに向いているからではなく善かれ悪しかれ、生活に大きな影響を及ぼし精神の高揚に大貢献できます。（中略）それ故、私は現地人女子に教育を施すご主人様の立派なご計画に熱狂します。私は前からわかっていました。それが現地人女子の惨状を変えることを。女性のみならず現地人社会全体にとって、女子教育は福

音となりましょう！ [ibid: 45]

カルティニがアベンダノン長官の「女子教育の計画」を絶賛する箇所である。換言すれば、アベンダノンは1911年版で長官在任中に頓挫した計画を披露し自画自賛しようとした。こうして、アベンダノンは「1901年1月21日付アベンダノン夫人宛書簡」を創作し、「ジャワの美しい自然」と「女子教育のカルティニ」のコンビネーションを提示した [Kartini 1911: 143-146]。しかし、教師になる機会を逸することだけは避けたいカルティニが思わず吐露した、アベンダノン夫人に助けを求める声は消し去られてしまった¹¹⁾。

さらに、この「創作書簡」に続けて「1901年1月31日付アベンダノン夫人宛書簡」を配置し、冒頭に次の原文(B)の斜体文のみを貼り付けた。すなわち、2通の書簡中に連続して自然描写を掲載することによって、ジャワの自然美を強調する編集方針が表出した。

- (B) 多くの愛や信頼について書かれたお手紙を拝読し、私は竹み前を見つめ、現実の嵐—さまざまなかえが激しく押し寄せ頭の中を駆け巡り、考え感じることも出来ず朦朧として、過ぎ去ると徐々に頭の中の霧が消え、私の親愛なる友人である立派な天使で恩恵を施す女性(筆者註アベンダノン夫人)を見上げた時、優しい微笑を湛えた口元や目元がよく見え、御手を取るために手を伸ばした瞬間に、驚きと共に幻想が消えました。頭の中で大きな呻き声が「私はその立派な気高い心から何のために慈愛と信頼を得ているのか。」と、尋ねました。「何のために。」—私は全てを思い起こし探しに探し—その愛や信頼を正当化する理由を見出すことができませんでした。

私は青空を見つめました—あたかもそこに答えを見つけることを期待するかのよう。目は無意識に雲の流れを追ひ、雲は揺れる椰子の緑で見えなくなり、輝き揺れる椰子の葉に目を向けると突然に元気回復、記憶が蘇りました。「なぜ太陽は輝くのかと、人は問う。その陽光を誰に、何に向けて発しているのか。おお、我が太陽、金色の太陽、私はあなたの励ましと美しく高貴な光で育ち、暖められ、あなたによって創造され生きています！！」私の親愛なるお方、その御慈愛と御心が私を高揚し—私は高貴な義務を果たすために全力で努力します。深謝申し上げることは、奥様すなわち私の心の光を見つけたこと！ご夫妻が幸福の星を齎してくださって以来、本当に私は別人—より良い人間になり、人生が一層素晴らしく！私は天からの授かり物には縁が無かったけれど、今、奥様の慈愛と信頼を通じて授かりました。(中略)ご夫妻を思うと苦しい時も私が暗闇にあっても力が湧き、ご夫妻は慰めそして光—涙しても全てを超越した高所に理想であるご夫妻が見え、美しく清く触れることを許されない所で輝いています。私は常に善を信じ実行—そしてご夫妻を知りました。その信念を誰も取り去ることは出来ません—善の存在を知っていますから！ [1901年1月31日付アベンダノン夫人宛書簡, Kartini, 1987, 43-44]

引用文中のカルティニが見つめた「青空」は、夫人の手紙を思案して自室から見た青空であり、海で見たそれではない。さらに、「あなた」つまり「我が太陽 mijn zon, 我が黄金の太陽 mijn gouden zon」は、1911年版で削除された後続の文章によって、アベンダノン夫人を意味することは明白で

ある。しかし、1911年版ではつぎはぎの配置によって斜体箇所がジャワの自然描写となる。しかし実際に、カルティニはアベンダノン夫妻を自らの計画のコンテキストの上で、光と形容し延々と賛美を続ける。そもそも、カルティニの自然描写はアベンダノン夫人の賛美を目的とし、自然を写實的に描写する意図が無い。そのゆえ、(A) 5月の乾季の海と(B) 1月の雨期の海の描写を通読して違和感が無く、結果的に両者を「1月付書簡」とする編集を許した。このように、自然美の描写に託してアベンダノン夫人を賛美する筆致は、「87年版カルティニ・ドキュメント」の特徴である。

この他に、例えば、アベンダノン氏宛 1903年2月1・4・17日付書簡3通を「切り貼り」と大幅な文章の削除で合成し2月1日付書簡とした。その結果、1903年2月付書簡はこの書簡だけになったため、カルティニの伝記を著したスロトはその著書に「*Kartini Jatuh Sakit* (カルティニ病に倒れる)」という一節を割き、「1ヶ月余りの間、1通も書簡を書いていないカルティニは、書簡も書けないほどの重病」と説く[Soeroto 1984 (1977): 307-308]¹²⁾。アベンダノンの編集が後世の作品に影響を及ぼした一例である。

一般に、名宛と書簡の時系列は書簡集で肝要な点であるが、アベンダノンは無視して編集した。前者の例では、1903年5月14日付アベンダノン氏宛の書簡に、同年同月18日付妻宛の書簡の一部を貼り付けたあと、妻宛の書簡は削除された。アベンダノンの抜粋と調整の手法は、アベンダノン夫人と差出人であるカルティニの尊厳にかかわる大問題である。後者では、1902年9月15日付書簡から一部を切り取り、12月12日付書簡中に貼り付ける等、いわゆる「合成書簡」である。このような編集姿勢はカルティニが提示した事実を我々に伝えることを妨げ、史料価値を低下させる。

さらに、2つの書簡集を詳細に対照すると、アベンダノンがカルティニによる地場産業(木彫工芸)の振興活動と、ジャワの女性問題を大幅に削除した事実が判明した[富永 2011: 86-122, 124-165]。1987年版では、前者は産業局長官も務めるアベンダノンに頻繁に書簡を送る必要があった両者の関係性-カルティニがアベンダノンに対し演じた役割を明示する。後者は、カルティニが知人の女性達を挙げ、当時・当該場所にいた女性にしか分らない思いを伝えている。紙幅の関係から本稿ではカルティニの社会活動について言及しない。

アベンダノンの編集を経た書簡に、カルティニの肉声は殆ど聞こえてこない。しかし、これまでオランダとインドネシアの双方で1911年版だけを基軸とする「カルティニ伝」が数多く編まれた。それらはカルティニ個人に対する誤解を招き、カルティニの意思とは全く無関係に、「ラデン・アジュン・カルティニ像」を作り出したことを否定できない。

第三章 1911年版がインドネシアに及ぼした影響

1. アベンダノンの編集がインドネシア語訳版に及ぼした影響

1922年、マレー語の翻訳書 *Habis Gelap Terbitlah Terang* (『闇を越えて光へ』)が出版された。*Door Duisternis tot Licht* 第4版のアベンダノンが記した「序文」によれば、

バライ・プスタカ Volkslectuur のリンケス D. A. Rinkes 博士が翻訳プロジェクトを引き受け、*Habis Gelap Terbitlah Terang* と題するマレー語の翻訳書が日の目を見た。翻訳者はペンネーム

で「四兄弟 Empat Saudara」と称するアブトゥラ Baginda Abdoellah Dahlan（筆者注 ライデン大学マレー語学科助教）、ザイヌディン Baginda Zainoedin Rasad（筆者注 ワーヘニンゲン高等農業専門学校卒）、ザイン Soetan Moechamad Zain（筆者注 ライデン大学マレー語学科助教、後にフォルクスラート議員）、ジャマルディン・ラサッド Baginda Djamaloedin Rasad（筆者注 ワーヘニンゲン高等農業学校卒）であった [Kartini 1976: xxv]。

ルーサーフォード論文は「マレー語訳版の序文に、アベンダノン自身がバライ・プスタカ Volkslectuur¹³⁾にマレー語訳版の刊行を求めた」と指摘する [Rutherford 1993: n 24]。そして翌年（1923年）、オランダで *Door Duisternis tot Licht* の第4版 3000部が刊行された [Kartini 1987: ix]。上述したマレー語訳版と第4版は連動して刊行されたと考えられる。このマレー語訳版は1987年版の「序文」よれば、ページ数が420頁と明記され、後に述べるパネ訳版が207頁 [Kartini 1987: XIV] であることと比較して（両者共にバライ・プスタカから出版）、1911年版の完訳の可能性はある。が、現在は流布していない。

1938年、インドネシア語版がパネ Armijn Pane（筆者注 スマトラ出身の作家、代表作『桎梏 Belenggu』、パネ抄訳版と記す）による翻訳で刊行された [Kartini 1976: xxv-xxvii]（出版年は [Kartini 1987: xiv-xv] を参照した）。表題は1922年版と同じであるが、一般にインドネシア人がカルティニを知るようになるのは、このパネ抄訳版の刊行以降である。今日でも *Habis Gelap Terbitlah Terang* といえばパネ抄訳版を指し、版を重ね、そこには公的象徴としてのカルティニが凝縮されている。

パネは1911年版すなわちアベンダノンの編集によって、原書簡の文脈を失したテキストを抄訳した結果、パネ抄訳版で生じた問題点を次に挙げる。これらの点は1987年版の刊行によって初めて認識できた。

- ① 1911年版を分母、パネ抄訳版を分子として算出すると翻訳時に3分の2が削除されている。さらに1987年版（全文掲載）を分母としパネ抄訳版を分子として算出すると9割が削除されているのである。
- ② パネはカルティニが挙げた実例を削除する一方で、原文にない文章を加筆し、また原文の意味とは異なる語句に置き換え、主語が変化した箇所もあり¹⁴⁾、全編にわたりこれらの問題点が見受けられる [富永 2011: 203-204]。

「原文にない文章」の一例を挙げると、パネ訳版1899年5月25日付ゼーハンデラール宛書簡中、「ke mana ia pergi, di sana kelihatan bekas jejaknya それ（時代精神）が及ぶところそこにその足跡が見られる」という文章は、1987年版にも1911年版にも無い。カルティニは似たことを書いてはいるが、パネ訳版の「付け加え」はカルティニの言を一層強調したものとなっている。これについては改めて別の機会に述べたい。次に、「原文の意味とは異なる語句に置き換えられた箇所」について、例えば、1901年11月29日付アベンダノン宛書簡で1987年版と1911年版に「喜劇を演じる」と記されたところを、パネ訳版では「ふりをする」に替えられ [pane 1938: 115]、カルティニが自身と社会の関係を表現する時に込めたシニカルなニュアンスが失われ、嘲笑を受けるカルティニ

の実像は消えた。別例では、1903年7月24日付アベンダノン夫人宛書簡で、1987年版と1911年版に「ウィルヘルミナ女王にサリムの事で援助を求める」と記されたが、パネ訳版ではウィルヘルミナ女王が *orang lain* ほかの人「*Pane 1938: 190*」に替えられた。

したがって、パネ抄訳版は1987年版の1割、しかも意味が変わる等もはや史料とは言い難い。いわば、カルティニの膨大な書簡がアベンダノンの編集という「額縁」に合わせて切り取られ、さらにパネがデフォルメした「物語」である。こうしてカルティニの意思とは全く無関係に、オランダ領東インドという枠内で「ラデン・アジュン・カルティニ像」が形成された。原書簡の大胆な削除すなわちカルティニの声は消され、カルティニが目指した理想とは別の方向性が示された。

さらに、1911年版から愛・喜び・幸福・希望・勇気・信念・誠実等、いわば寄せ書で目にする抽象名詞が切り取られ、パネ抄訳版に散在する。結果、本来はカルティニ個人の感情を吐露したこれらの言葉が、具体性を削除されたゆえに時空に制限されず、カルティニの真意を汲むにはカルティニの理性や情報があまりにも限定的であるため、読者に恣意的な想像を許す。すなわち、パネ抄訳版はカルティニを語っていないが、カルティニという「過去」と、読んで「今」ある者を結びつけ一体性を作り出し感動を与える役割を果たす。なぜ、そこまでするのか。なぜなら、パネ抄訳版は政府の「お墨付き」であるバライ・プスタカから刊行されたことを考慮に入れると、カルティニが説くオランダとの協調を東インド社会にアピールする意図があったからである。オランダはドイツがポーランドへ侵攻する大戦前夜の緊張の中にあり、当時、宗主国と植民地社会で好評を博し同時に種族を超克する「名の通った人物」は、カルティニの他に無しと言っても過言ではなく、オランダとインドネシアの友好の証しとして、「ラデン・アジュン・カルティニ」がその刊行を通じてインドネシア中にあまねく姿を現したことを意味する。

また、パネ抄訳版は、1911年版を通じてカルティニを知る者（オランダ人とオランダ語のできるインドネシア人）との間に情報の差を、即ちカルティニに対する認識に差を生させた¹⁵⁾。ジャワを知る者には「ラデン・アジュン」即ち未婚のジャワ女性貴族の称号は、自己主張をしても最後は父親に従う従順な娘のイメージが表出し、ジェンダーが強調される言葉であった。繰り返すがパネ抄訳版に掲載されたアベンダノン宛書簡は1911年版の3割、1987年版と比較すると僅か1割未満のため、インドネシア人がカルティニをインドネシア語で知るにはアバウトな理解となる。日本語訳『闇を越えて光へ』（1940年）はパネ抄訳版の翻訳であることから、たとえ高い評価を受けた美文であってもパネの意識と編集の影響を免れることはできない。

2. 1911年版とパネ抄訳版がインドネシア社会に与えた影響

Door Duisternis tot Licht が版を重ね、カルティニがオランダ本国と植民地社会で知られ始めた20世紀初期は、東インドで民族運動が萌芽・展開した時代であった。*Door Duisternis tot Licht* はインドネシアのナショナリスト達に読み継がれ影響を与えた¹⁶⁾。次のような回想や独立インドネシアの教科書の記述は、この書物の影響の大きさを物語っている。スカルノ政権時代の閣僚であったアブ・ハニファ *Abu Hanifa* は、

インドネシア・クラブ *De Indonesische Club* が入っていたジャカルタの「クラマツ *Kramat* 106番（筆者注 青年の誓い *Sumpah Pemuda* が行われた所）」に、ジュバラのレヘントの令嬢

であったカルティニの肖像があり、解放のための闘争の象徴で、カルティニが既婚か否か、関知することではなかった [Hanifa 1951 (1949) : 6]。

とする。そして、1952 年版中等学校用教科書 *Sedjarah Indonesia* (『インドネシアの歴史』) ではカルティニの肖像写真を掲載し、

R. A. カルティニはインドネシアの女子に男子と同じ教育を教授することをめざし、女性の地位向上に努めたことを顕彰し、R. A. カルティニの誕生日 (4 月 21 日) は女性達によって祝われている [Sundoro 1952 : 120–121]。

とする。上述は、「技術と知識の進歩の時代 *Djaman Kemadjuan teknik dan pengetahuan*」の単元に収録されていた。また、所謂「第一世代」と呼ばれる独立から十数年間の指導者達は、カルティニを次のように認識していた。

彼らは進歩を信じ、今から思えば例外的であるが高学歴、深い洞察力をもって変革を最前線で行き組み、というのは、変革に取り組むことが独立の真髄であり、スカルノ Soekarno をはじめ彼らはカルティニと同じように進歩と解放を信じていたから、カルティニを「イブ Ibu (インドネシア語で母の意味)」と捉えるのではなく、自分達と同じ精神の持ち主として理解した [Sears 1996 : 196–197]。

すなわち、カルティニはインドネシア共和国初期には解放の象徴として考えられていた。1964 年、カルティニは *Pahlawan Kemerdekaan Nasional* 即ちインドネシア共和国国家独立英雄に列せられた。こうして、「ラデン・アジュン・カルティニ」は公式にインドネシア共和国の歴史上の人物として認知された。

1979 年、カルティニ生誕百周年に *Door Duisternis tot Licht* インドネシア語完訳版 *Surat-Surat Kartini* (『カルティニの書簡集』) が刊行された¹⁷⁾。実に初版から 68 年、パネ抄訳版から 40 年の歳月を経て、やっと情報量は 1911 年の初版時と足並みをそろえた。とはいえ、1987 年版を基準にすれば、インドネシア語でカルティニの原書簡の約 3 割が公開されたに過ぎなかった。

しかしその時、パネ抄訳版は第 9 版を重ねていた¹⁸⁾。それは、パネ抄訳版で形成されたカルティニのイメージを払拭することの難しさを意味した。原文書簡の 9 割が失われたパネ抄訳版には、恣意的なカルティニ像を形成する余地がある。事実、カルティニは必要に応じて各種の「肩書き」を付けられ、例えば、「ラデン・アジュン・カルティニ」と呼ばれ若き乙女のイメージを維持しつつ良妻賢母、教育者、文筆家、倫理政策の好例、女性解放運動家、民族運動の先駆者等と称賛された¹⁹⁾。その逆に、カルティニは何もしていない等々さまざまに言われてきた。

まさにこの「曖昧性」によって、「都合のよい」カルティニ像が形成されてきた。たとえば、スカルノ時代に無かった「イブ Ibu (母)」のイメージが、カルティニに定着するのはスハルト時代のことであった [Sears 1996 : 8, 197]。「カルティニの日 *Hari Ibu Kartini*」(4 月 21 日) には「イブ・キタ・カルティニ *Ibu Kita Kartini* (我らの母カルティニ)」を唱歌し、カルティニに良妻賢母の

イメージを演出した²⁰⁾。カルティニを祝うはずの催事に、実はカルティニを利用してファッションの側面から女性を動員する意図がみえる。したがって、所謂「お墨付きのカルティニ像」をインドネシアで批判することは難しい。「作られたカルティニ像」についてテイラー Jean G. Taylor は、生前のカルティニは身体を締め付けない服やローヒールを用いたこと、殆ど髪飾りなどを付けない女性であったことを具体的に示し、カルティニの日に女性が着用する身体を縛りつけるような動きのとれない正装いわゆる「カルティニスタイル」との違いを指摘する [Sears 1996: 37]。

テイラーの言葉には、スハルト時代にカルティニへの称賛を演出する「カルティニスタイル」を通じて、ジャワ人女性のコスチューム²¹⁾が広められ正当化されていく過程が表出する。それは、国民統合の過程で、集団性における多数派の自己中心主義という傾向が混入しやすい弱点 [古田 1996: 83] を浮き彫りにした。

確かに、1911 年版やパネ抄訳版は「ラデン・アジュン・カルティニ像」を形成する役割を果たした。「カルティニ物語」は、実のカルティニを変容させ一人歩きを始めた。こうしてカルティニは婚姻後の名称ではなく、「うら若き乙女ラデン・アジュン・カルティニ」としてフリーズされ、実際に「ラデン・アジュン・カルティニ Raden Adjeng Kartini」即ち令嬢時代の呼称が公認されている。そして、カルティニは現在、基本的にムスリムが大半を占めるインドネシア人女性の地位向上のシンボルとして語られている²²⁾。

しかし、それは、真意を無視された一人の女性に対する抑圧性を意味する。同時に、カルティニに即効性を求めて「消費」すればその効力は低下し、カルティニの存在を薄れさせることになる²³⁾。何よりも、カルティニ研究に求められることは、カルティニの失われた声に真摯に耳を傾けることにある。

むすびにかえて

概して、従来の研究ではカルティニが「何であったか」、すなわち「民族主義の先駆者」、「女性解放運動の先駆者」として認識されたことはよく理解することができる²⁴⁾。しかし、女性が伝統的価値観によって社会的に束縛された状況下で、何かを成し遂げる一結果を出すという展望それ自体が机上の空論であった時、それはカルティニにとって何を意味したのか。当時のカルティニが「どうであったか」についての考察が、1911 年版だけを用いた先行研究において僅少であることは、アベンダノンの編集がそれを十全に提示していないことに起因する。そればかりか編集による大胆な省略は、教育の重要性を唱道するカルティニやオランダ語とジャワ語の二重言語状況を強調するテキストに変貌した。本稿の冒頭および「注 1」で述べたように、1911 年版を基にした研究はアベンダノンの編集の影響を免れることは難しい。

同時に、従来の研究ではカルティニがインドネシア独立運動史に再生される過程が描かれた。それは、アジアの新興諸国の独立が輝いていた時代は、アジアのナショナリズムを論じることは基本的には独立という輝かしい成果をもたらした成功物語を書くことを意味していた [古田 1996: 3]。こうして、カルティニはインドネシア民族運動史の初期段階に位置付けられた。確かに、様式教育を受けオランダ語で広く世界を学び、自らの伝統社会を対象化し、新時代の到来を意識する一群の若者が出現したことは事実である。しかし、学校教育の機会に恵まれたのは男子に偏向し、カルティニはジャワの慣習によって小学校を退学させられ、進学は果たせぬ夢に潰えた。実際に、1911

年版を主要史料とすれば、乏しい事実から構築されたカルティニ像が提示される場合が生じる。すなわち、1911年版とその翻訳版はカルティニ個人の解放を民族の解放へ転化する余地があり、それはカルティニがイメージしたこととの組み換えが始まることを意味する。

1987年版に表出するカルティニは、「新しい女性」を自称し「日々進歩する世界」に自らを位置付け生きぬこうとした。カルティニは現代的世界的な問題を具現し、それを解決しようとした。だから、東インドをはるかに乗り越えた存在を目指した〔富永 2011：198-199〕。カルティニはジャワの因習からの解放とオランダ人との協調を書簡で唱え、その方法を模索してオランダとジャワの間で葛藤する自らの姿を書簡に写し出した²⁵⁾。

しかし、アベンダノンは出版を通じ、カルティニを倫理政策の文脈で「植民地の女子教育推進者」として公認させた。オランダでの成功はカルティニをかえって「オランダ領東インド」という限定した枠に閉じ込めた。そこに、東インドが Groot Nederland（大オランダ）の一部であるという帝国主義的構図を再確認し、それを堅持しようとするオランダの意志が働いた（アベンダノンはまさにそのための「公僕」であった）。こうして、アベンダノンによってカルティニは植民地東インドの「闇」とそれを照らすオランダの光という言説の中に位置付けられた。しかも、カルティニはオランダ留学を志向したことから、カルティニはヨーロッパ文明を「光」として希求する女性と解釈され、つまり植民地政策の忠実な支持者とみなされた。したがって、*Door Duisternis tot Licht* が版を重ねた時代の読者が想像する「光と闇」と、カルティニが意味することを求めた「光と闇」とは決して同じではない〔富永 2011：168-176〕。換言すれば、1911年版はアベンダノン、即ち東インドを支配したオランダ人が選定した文章で構成された「ラデン・アジュン・カルティニ物語」である。その刊行がカルティニの死後であったためカルティニはアベンダノンの編集に意見する機会を与えられていないことを、強調したい。

カルティニが見ざるをえなかった世界が、カルティニ個人にとってどのようなものであったか、深く受け止めるべきである。そして何よりも、カルティニが「個人」の解放・自立をどのように求めたかを重視すべきである。ゆえに、1911年版に頼らない新たなカルティニ像を提示する必要がある。1987年版を1911年版と比較しながら分析することは、アベンダノンの編集によって意図的に隠されてきたカルティニの肉声を再び明らかにしてくれる。カルティニは、母語（ジャワ語）では表現し難いものの外周をオランダ語でしっかり固めて文章を書き、文通相手に伝えた。書簡中にカルティニが言葉で包み込んでいる真実を発見する、すなわち、1987年版を用いて失われたカルティニの声を求める意義は、ここにある。その時、カルティニの実像が見えてくるであろう。

注

- 1) *Door Duisternis tot Licht* だけを用いた先行研究を次にあげる。

オランダで1911年に、デフェンテル C. Th. van Deventer (1857-1915, 倫理政策の唱道者) が *De Gids* に「カルティニ」を論じ、翌年に小冊子となって出版された〔Deventer 1912〕。それは、カルティニに言及した最も初期の論文であると同時に、デフェンテル論文に代表されるように、オランダ統治時代、カルティニは倫理政策の文脈で言及された。カルティニ研究では、ボウマン H. Bouwman はオランダ語の雑誌・新聞を用いて、カルティニを取り巻く記述や資料を多く引用した *Meer Licht over Kartini* (『カルティニにもっと光を』) を上梓した〔Bouwman 1954〕。ニューウェンハウス R. Nieuwenhuys は、カルティニをオランダ語とジャワ語のバイリンガル状態で「二つの祖国のはざま」に生き、両者の視点をもつ者と認識し〔Nieuwenhuys 1959 (1988)：199-214〕、またカルティニをオランダ植民地文学の中に定位した〔ibid 1972

(1987)：314-322, 1975：89-106]。フレーデ・デ・ステュールス Vreede-De Steurs はカルティニの家族と家庭内のアダットを解説し、H. ギアツ Hildred Geertz の分析 [Geertz 1964：1-26] に対して不鮮明な点を指摘し、またプラムディア [toer 1962] の主張を支持してカルティニの「庶民性」を強調し [Vreede-De Steurs 1965：233-243]、さらに、カルティニの女性解放の戦いがインドネシア民族の社会的解放へ統合され、「国家独立英雄」という公的象徴として神聖視されるカルティニは、もはや個人的な史実が失われているとする [ibidi 1968：392-393]。しかし、*Door Duisternis tot Licht* で形成された「カルティニの虚構性」を指摘するには、史料の欠如に阻まれ、実像を提示するには至っていない。

インドネシア語資料として次の2作品が著名である。プラムディアのカルティニ評伝 [Toer 1962] - 苦節を経たその再版 [ibid：1998] と、カルティニが「国家独立英雄」に列せられた以降に出版されたスロト [Soeroto 1977] のカルティニ伝である。プラムディアやスロトのカルティニ論を評したものとして、土屋 [土屋 1991] があり、また、それらはカルティニがインドネシア共和国でどのように捉えられてきたかを解説している。プラムディアはアベンダノンの編集に対して批判的であったが、「ノーカット」のカルティニの書簡が提供されなかった当時は推測の域を出なかった。1979年、カルティニ生誕百年を記念した論集 *Satu Abad Kartini* が編まれた。このほかのインドネシア語資料も、基本的にカルティニを「独立英雄」として文化・社会統合の文脈で顕彰し、インドネシア・ナショナリズムの先駆者、またフェミニズムの先駆者とするカルティニの描写に収斂される。

インドネシアのフェミニズムを論じた *Kartini Centenary* (カルティニ生誕百年記念論集) が1980年にオーストラリアで上梓され、「カルティニ生涯・業績・影響」が巻頭論文として掲載された [Thomson Zainu'ddin 1980：1-29]。ほかにも、カルティニの妹カルディナ [Reksonegoro 1966] や、スバディオが女性問題の視点からカルティニの「多妻家庭」について考察した [Soebadio 1978]。

カルティニを民族運動の好個の素材として挙げるのはファーニヴァル [Furnival 1939：242] だけではない。ケーヒン [Kahin 1952：64]、ウェルトヘイム [Wertheim 1964：208]、スメイル [Smail 1971：282] は、著作の一段落にカルティニを「民族運動の先駆者」として記載した。わが国においても、永積が思想史の観点からカルティニを「民族意識覚醒の先駆者」として論じ、インドネシア民族運動の啓蒙段階にカルティニを位置付けた [永積 1980：70-97]。土屋は、欧米の諸論文が20世紀初頭をインドネシア・ナショナリズムの起点とすることに対し、カルティニのうちに19世紀と20世紀の連続性を表出し、その時代に生まれた精神が民族運動の時代に引き継がれ、インドネシア共和国が形成される過程を、文化統合・社会統合のファセットから描き出した [土屋 1984, 1986, 1990]。

- 2) 次の事例を挙げたい。1921年に「スラバヤ新聞 *Soerabaiasch Handelsblad*」紙上において、カルティニが本当に書簡を書いたのか否かについての論争があった。カルティニの書簡は副理事官夫人ホーヘナート G. A. Hogenaad の指導と添削のもとに書かれたといわれた (副理事官の在任期間は1899年6月5日～9月13日)。それに対するアベンダノンの反論は、書簡が出版目的で書かれたものではなかったため、語句や文章スタイルに校正が行われたが、それがカルティニの精神的使命を低めるものではない。校正は語形・変化形程度のレベルの修正であり文章を変えることをしていない。ジャワ人女性が立派なオランダ語で正確に書簡を綴ったことを示すことが、書簡の編集の目的ではない。ジャワ人女性の心を認識できるオランダ語で記された思想を一冊にまとめた事の方が重要である。言葉に対する感覚は、疑いようも無く東洋的色彩があるとし、カルティニの書簡には加筆・修正していないことを重ねて明言している [Termoshuizen 2004：167-174]。
- 3) 発行部数については [Kartini 1987：ix]、商況については *Door Duisternis tot Licht* 第二版・第三版のアベンダノンによる「前書き」を参考にした。
- 4) 初版はファン・ドルプ社 G. C. T. van Dorp & Co. から刊行され、出版地はスマラン Semarang・スラバヤ Soerabaja・ハーグ¹⁾ s-Gravenhage と印刷されている。著作権がハーグの N. V. Electriche Drukkerij Luctor et Emergo に移った第二版以降はオランダでのみ出版され、第四版 (1923年) まだが同じ版元から刊行された。第五版 (1976年) はアムステルダム Amsterdam にあるナブリック Nabrink から出版された。
- 5) ヤケット論文はアベンダノンの編集とオランダ人のカルティニ受容について、倫理政策の時代に西欧型の教育を受けたインドネシア人の出現をオランダ人が実感したこと、および文面から政治問題を除いたことにあった [Jaquet 1988：77] とし、カルティニの没後7年を経て出版したにも拘らず、アベンダノンが成功を収めた理由とする。
- 6) 第4版序文によれば、英語 (1920年, 1960年, 1976年)、アラビア語 (1926年)、フランス語、ロシア語に翻訳され、スペイン語はアベンダノン夫人の翻訳であった [Kartini 1976：xxv-xxvii] (出版年は [Kartini

- 1987: xiv-xv]を参照した)。日本語版は、パネ抄訳版を基にして牛江清名が1940年に、早坂四郎が1955年に翻訳し、刊行された。
- また、地方語版－ジャワ語（1938年）、スダ語（1930年）、マドゥラ語、バリ語－が刊行された。マレー語・インドネシア語訳については第三章で述べる。
- 7) 提供されなかった書簡11通の中には既に消却された書簡もあるという、ゼーハンデラール宛書簡についてはJ. Cotéの編集による、カルティニからゼーハンデラールへ宛てた書簡のみを蒐集した資料[Kartini 2005]を用いた。
- 8) 文通開始は、アベンダノンよりも1年余り先立つ1899年5月25日付書簡がカルティニからの第1信であり、1911年版に収録された最後の書簡は1903年4月25日と付され、両者は4年間にわたり文通による親交を温めた。
- 9) *Brieven* を主要資料とする論文にはヤケット [Jaquet 1988, 1995]、コーテ [Coté 1998, 2004, 2008] がある。とくに、コーテの研究手法は、カルティニとアベンダノン夫人の往復書簡の現物の丁寧な翻訳、またカルティニの妹達など関係文書の蒐集と翻訳を中心とするが、基本的にはインドネシア民族主義の中に位置付けられたカルティニの叙述を越えるものではない。筆者 [1991, 1992, 1993, 2010, 2011] も含め、ルーサーフォード [Rutherford 1993]、テルモスハウゼン [Termouhuizen 2004]、アンテン [Anten 2005] などカルティニに関する論文は途切れることなく書かれている。また、カルティニを主題とする複数の論文を発表しているテイラー [Taylor 1989 a, 1989 b, 1993, 1997] は、*Brieven* の短評（全文4頁余りの書評）で、1911年版で殆ど言及されなかった「多妻家庭」の実態と姉妹間の長幼の序、スマランの理事官やデマックの叔父とカルティニの関係を指摘する [Taylor 1989 b: 156-160]。
- 10) 筆者が博士論文に資料として付した *Brieven* の翻訳全文の行数を分母とし、*Door Duisternis tot Licht* と共通する文章の行数を分子として算出した [富永 2011: 7]。
- 11) 我々が1911年版を読んで何か綺麗事に感じる時、このようにカルティニの肉声が消されていることも一因となっているのであろう。
- 12) カルティニは同年3月4日付アベンダノン夫人宛書簡で自身の病を述べているが、アベンダノンの編集がスロトの誤解を招いたことは否めない。
- 13) オランダ植民地政庁が1917年に設立した図書の選定、出版を行う機関。本文の例のように若い執筆者に発表の場を与え、文学の振興に寄与したという評価もある一方で、官製の出版社という性格から作家達が検閲下に置かれたという批判もある。
- 14) 1911年版の編集時に原文の主語が替えられ、インドネシア語版でそれが踏襲されているが、抄訳全体の信憑性にかかわる問題である。
- 15) ノト・スロト (R. M. Noto Soeroto 1888-1951, 詩人) に代表されるように、原書でカルティニにアクセスできるオランダ語教育を受けた者が存在する。それ故、同じインドネシア人のなかでもカルティニ理解に情報差が生じ、受けとめ方も異なる。例えば、インドネシアを代表する作家のP. A. トゥールはカルティニを思想家と評価する [Toer 1962] が、インドネシアにおいて一般にそれは流布していない。
- 16) この点については、土屋論文 [土屋 1991: 164-180] で詳細に述べられている。
- 17) 完訳版では、1911年版の副題の中の *gedachten* 思想というオランダ語が、インドネシア語の *renungan* 瞑想と翻訳された。それは、カルティニが生前に実現できなかった美しい理想が、随所に散りばめられて編集された1911年版を、総体的に表す命名といえよう。
- 18) 1978年までにパネ抄訳版はオランダ時代に第2版（1939年）、スカルノ時代に第3版（1951年）・第4版（1962年）・第5版（1963年）が出版された。スハルト時代になって直に第6版（1968年）が出版され、第7版（1972年）・第8版（1978年）と重ねた。
- 19) 現代のインドネシアで社会進出を果たした女性達をまとめた本の題名にカルティニの名前を冠しているが、本の中ではカルティニ個人に一切言及していない編集を目にする。つまり、象徴としてのカルティニである。
- 20) カルティニの日（4月21日）の祝賀行事について、筆者がインドネシアに滞在し調査を行った1985年-1987年には、ダルマ・ワニタ（公務員家庭を中心とする婦人会）が主催する「カルティニコンテスト」が各地で開催されていた。女性は「カルティニの日」を機会としてサロン *saorong*（インドネシアの民族衣装に相当、ジャワでは一般にバティックの木綿を使用）等を買求め、カルティニを模したジャワ貴族の装束で出場した。そして、「カルティニに最もよく似たと評された」女性が優勝者に選ばれた。それはスハルト政権時代が求める「相応しい女性像」を意味した。また、学校では、カルティニをテーマとした

「詩」のコンクールを開催するところもあった。

- 21) クバヤ *kebaya* と呼ばれるジャワ人女性の上衣とカイン・パンジャン *kain panjang* と呼ばれる腰巻布を着用した正装を意味する。
- 22) たとえば、「国家独立英雄カルティニ」について、解説を中学用副読本（1985年版）に求めると、冒頭で「カルティニを女性解放の先駆者とし、男性と同じ権利を獲得するため、教育によって女性の地位向上を目指したとする。次いで略歴では、インドネシア人女性の進歩の手段として教育を提唱する過程で、カルティニが読書で知りえたヨーロッパの女性とインドネシアの女性を比較し思索を深め、オランダ人に書簡で男女同権を説いたことに言及する。そして、編集・出版された書簡集 *Door Duisternis tot Licht* には、女性の進歩を目指し男性と同レベルへ引き上げるというカルティニの理想が見出される」と、特筆されている。それはまさに、アベンダノンの出版目的であった女子教育の推進を反映する記述である。程度の差こそあれ、伝記を含めインドネシア人の手によるカルティニ関連の書籍は、上述の範疇にある。また、筆者が1986年（*Brieven* の出版以前）に行った大学生を対象としたアンケート調査で、カルティニは「インドネシアの女性の解放に努力した女性」という回答が9割強を占めた。すなわち、副読本やそれに即したカルティニ関連の書籍の内容が見事に反映された回答であった。
- 23) たとえば、フローレス島をフィールドとする青木恵理子（文化人類学者）は、フローレス島の女性達が「ジャワ人のカルティニ」として捉え、「自分達」のこととは思えないから無関心であると指摘する。この指摘は、ジャワ以外のほかの地域にも当てはまることであろう。
- 24) 注1の先行研究を参照。
- 25) 筆者はこの点を主としカルティニの活動について博士学位論文に記した。機会をあらためて述べたい。

参考文献

- Kartini, R. A., 1911, *Door Duisternis tot Licht : Gedachten voor ne over het Javaansche volk*, bezorgd door J. H. Abendanon, s'-Gravenhage, Semarang, Surabaya : Van Dorp.
- , 1912, *Door Duisternis tot Licht : Gedachten voor ne over het Javaansche volk*, bezorgd door J. H. Abendanon, s'-Gravenhage : Luctor et Emergo. Naar de 2e en 3e druk herzien.
- , 1976, *Door Duisternis tot Licht Gedachten voor ne over het Javaansche volk*, bezorgd door E. Allard, Amsterdam : Nabrink.
- , 1987, *Brieven aan mvrouw R. M. Abendanon – Mandri en Haar Echtgenoot*, bezorgd door F. G. P. Jaquet, Dordrecht : Foris Publication.
- , 1985 (1938), *Habis Gelap Terbitlah Terang*, diterjemahkan oleh A. Pane, Jakarta : P. N. Balai Pustaka. (Kartini, R. A., 1911, *Door Duisternis tot Licht*, bezorgd door J. H. Abendanon, s'-Gravenhage, Semarang, Surabaya : Van Dorp.)
- , 1940, 『暗黒を越えて』牛江清名訳, 日新書院 (R. A. Kartini, 1938, *Habis Gelap Terbitlah Terang*, diterjemahkan oleh A. Pane, Jakarta.)
- , 1964, *Letters of a Javanese Princess*, tr. by A. L. Symmers, ed. by H. Geertz, New York : Norton.
- , 1979, *Surat – Surat Kartini Renungan Tentang dan Untuk Gangsanya*, diterjemahkan oleh S. Sutrisno, Jakarata. (Kartini, R. A., 1911, *Door Duisternis tot Licht*, bezorgd door J. H. Abendanon, s'-Gravenhage, Semarang, Surabaya : Van Dorp)
- , 1987, 「ジャワ人に教育を」富永泰代訳, 『南方文化』第14号。
- , 1989, Kartini : Suatu surat kepada Ny. R. M. Abendanon-Mandri dan suaminya, diterjemahkan oleh S. Sutrisno, Jakarata : Djambatan (Kartini, R. A., 1987, *Brieven aan mvrouw R. M. Abendanon – Mandri en Haar Echtgenoot*, bezorgd door F. G. P. Jaquet, Dordrecht)
- , 1992, *Letters from Kartini : an Indonesian Feminist, 1900–1904*, tr. by J. Coté, Monash University.
- , 2005, *On Feminism and Nationalism : Kartini's Letters to Stella Zeehandelaar 1899–1903*, tr. by J. Coté, Clayton : Monash University Press.
- , 2015, *Kartini : The Complete Writings 1898–1904*, ed. and tr. by J. Coté, Clayton : Monash University Press.
- 青木恵理子, 2012, 「蘭領東インドにおけるロマンチック・ラブと近代家族：ジャワ女性の解放を希求したカルティニの視点から」『国際社会文化研究所紀要』第14号。
- Anten, J., 2005, “De Ontrekende Brief van Kartini”, *Indische letteren*, vol.20.

- Arbaningsih, D., 2005, *Kartini dari Sisi Lain : Melacak Pemikiran Kartini tentang Emansipasi "Bangsa"*, Jakarta : P. B. Kompas.
- Bouman, H., 1954, *Meer Licht over Kartini*, Amsterdam : H. J. Paris.
- Coté, J. ed., 1998, "The correspondence of Kartini's Sisters : Annotations on the Indonesian Nationalist Movement, 1905–1925", *Archipel*, 55.
- , 2002, "Reading Kartini 1899–1999 : Education and Colonial Experience in Java", in Goodman, J. (ed.), *Gender, Colonialism and Educaion : the Politics of Experience*, London : Woburn Press.
- , 2008, *Realizing the Dream of R. A. Kartini : Her Sisters' Letters from Colonial Java*, Athens : Ohio University Press.
- Deventer, C., 1912, Th., *Kartini, overdruk uit De Gids 1911*, Amsterdam : Uitgaaf Mij.
- Elderhorst-van Hofwegen, J. M., 1990, "Het Kartini-beeld van J. H. Abendanon : de Helden en de Mens", *Indische Letteren*, vol.5.
- Furnival, J. S., 1939, *Netherlands India : A Study of Plural Economy*, Cambridge : Cambridge University Press.
- 古田元夫 1992, 「アンダーソン『想像の共同体』」長崎暢子・山内昌之（編）『現代アジア論の名著』中央公論社。
- , 1996, 『アジアのナショナリズム』山川出版社。
- Hanifa, A., 1951, "Raden Adjeng Kartini", *Cultuur Nieuws Indonesië, April-nummer 1*, Amsterdam : N. V. De Arbeiderspers.
- Jaquet, F., 1988, "Kartini : een Reactie", *Indische Letteren*, vol.3.
- , 1995, "Vier Zusters", *Indische Letteren*, vol.10.
- 加納啓良, 2012, 『東大講義 東南アジア近現代史』めこん。
- 永積昭 1980, 『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会。
- Nieuwenhuys, R., 1978, *Oost-Indische Spiegel*, Amsterdam : Em. Querido's Uitgeverij B. V.
- , 1988, *Met Vreemde Ogen : Tempo Doeloe – een verzonken wereld*, Amsterdam : Em. Querido's Uitgeverij B. V.
- Ovink-Soer, M., 1925, "Persoonlijke Herinnering aan R. A. Kartini", *Vrij Arbeid*, Mei-nummer
- 桜井由躬雄, 2003, 『東南アジアの歴史』放送大学振興会。
- Sears, L. J. ed., 1996, *Fantasizing the Feminine in Indonesia*, Durham & London : Duke University Press.
- Smail, J., 1971, "Indonesia", in Steinberg, D., J. (ed.), *In Search of Southeast Asia : a Modern History*, Oxford : Oxford University Press.
- Soebadio, H., 1978, "Kartini, a Modern Woman, and yet a Child of her Time", *The Indonesian Quarterly* vol.VI.2.
- , ed., 1980, *Satu Abad Kartini : Bunga Rampai Karangan mengenai Kartini*, Jakarta : Sinar Harapan.
- Sundoro, 1952, *Sedjarah Indonesia untuk Sekolah Landjutan*, Djakarta : Jajasan Pembangunan Djakarta.
- Soeroto, S., 1977, *Kartini : Sebuah Biografi*, Jakarta : Gunung Agung
- Steinberg, D., J., 1971, *In Search of Southeast Asia : a modern history*, Oxford : Oxford University Press.
- Taylor, J., 1989 a, "Kartini in her Historical Context", *Bijdragen tot Taal-, Land- en Volkenkunde*, 145.
- , 1989 b, "A New Edition of Kartini 's Letters", *Asian Studies Association of Australlia Review*, 13.
- , 1993, "Once More Kartini : Autonomous Histories Particular Truth", in Sear, L. J. (ed.), *Esseys in Honor of John R. W. Small*, University of Wisconsin, Center for Southeast Asian Studies, pp.155–171.
- ed., 1997, *Women Creating Indonesia : The First Fifty Years*, Clayton : Monash Asian Institute.
- Termoshuizen, G., 2004, "Was Kartini wel de Schrijfster van Haar Brieven? : een Polemie uit 1921", *Indische Letteren*, 19.
- 土屋健治, 1984, 「カルティニの心象風景」『東南アジア研究』第22巻1号。
- , 1986, 『カルティニ再論』日蘭学会編, 『オランダとインドネシア』山川出版社。
- , 1991, 『カルティニの風景』めこん。
- Toer, P., A., 1962, *Panggil Aku Kartini Saja jilid.I dan II*, Jakarata : Nusantara.
- , 2000, *Panggil Aku Kartini Saja : Jepara, 25 Mei 1899, Sebuah Pengantar pada Kartini*, Jakarta : P. T. Hasta Mitra.
- 富永泰代, 1991, 「カルティニの『世界認識』の形成過程」『南方文化』第18号。
- , 1992, 「土屋健治著『カルティニの風景』」『史学雑誌』第101編第10号。

- , 1993, 「カルティニの著作と追悼記事について」『史林』第76巻4号。
- , 2010, “Kartini : A Woman of Cosmopolitan Outlook in Late Nineteenth-Century Java”, in Y. Nagazumi (ed.), *Large and Broad : The Dutch Impact on Early Modern Asia, Essays in Honor of Leonard Blussé*, Tokyo : The Toyo Bunko.
- , 2011, 「カルティニの虚像と実像：1987年編カルティニ書簡集の研究」博士学位論文（東京大学）
- Tomson Zainu’ddin, ed., 1980, *Kartini Centenary : Indonesian Woman Then and Now*, Melbourne : Monash University.
- van den Berg, J., 1998, “100 Jaar Feiten en Fatasien over Java”, *Indische Letteren*, vol.13.
- Vierhout, M., 1943, *Raden Adjeng Kartini, 1879–1904 : Een Javaansche over de Nooden ed Behoeften van Haar Volk*, ‘s-Gravenhage : Oceanus.
- Vreede – de Steurs, C., 1965, “Kartini : Feiten en Ficties”, *Bijdragen tot Taal-, Land- en Volkenkunde*, 121.
- , 1968, “Een Nationale Heldin : R. A. Kartini”, *Bijdragen tot Taal-, Land- en Volkenkunde*, 124.
- Vierhout, M., 1943, *Raden Adjeng Kartini, 1879–1904 : Een Javaansche over de Nooden ed Behoeften van Haar Volk*, ‘s-Gravenhage : Oceanus.
- Wertheim, W., F., 1964, *Indonesian Society in Transition*, The Hague : van Hoeve.
- Zeggelen, M., 1945, *Kartini : Een Baanbreker voor Haar Volk*, Amsterdam : Meulenhoff.